

国内研修成果レポート

論文題名および研修課題：「ボーイスカウト教育の教育効果の研究」

英文タイトル：A Study of Educational effects of Scout Education

研修者指名：田中 優（人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻・教授）

1. はじめに

学校教育においては、2018年度から小学校で道徳が教科化された。また近年、徳育的能力や資質を高める教育において、体験活動の重要性が指摘されている。研修者は、2014年から現在まで、日本のボーイスカウト教育の教育効果に関する一連の研究を続けており、ボーイスカウト教育には、徳育的能力や資質を高める教育効果があることを明らかにしている（田中、2016；2017；2018a；2018b）。

今回の国内研修では、研修者がこれまで取り組んできた小学高学年から中学生に相当するボーイスカウトにおける体験学習の教育効果の研究を更に進め、現在、社会人として多方面で活躍するボーイスカウト経験者への面接調査を実施し、質的研究の新しい方法論である複線径路・等至性アプローチ（TEA）による分析から、ボーイスカウト教育の「過程としての教育プロセス」を明らかにし、これまでの量的研究から得られた「結果としての教育効果」に、質的研究により得られた「過程としての教育プロセス」に関する知見を加えることから、ボーイスカウト教育の教育効果を総合的に明らかにすることを目指した。

2. 問題と目的

2-1：体験活動と3つの教育

中央教育審議会(2013)は「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」において、「体験活動は人づくりの“原点”であるとの認識の下、未来の社会を担う全ての青少年に、人間的な成長に不可欠な体験を経験させるためには、教育活動の一環として、体験活動の機会を意図的・計画的に創出することが求められている。」と体験活動の意義と重要性について述

べている。また、「地域・学校・家庭・民間団体・民間企業等がそれぞれの立場で自らの役割を適切に果たし、連携していくことが必要である。」と教育の連携について言及している。

教育の連携については、フォーマル教育（定型的教育）、インフォーマル教育（無定型的教育）、そして、ノンフォーマル教育（非定型的教育）の3つの教育の連携が重要である(図1)。

フォーマル教育とは、年代別に等級づけされた小学校から大学に至る教育制度である。イン

フォーマル教育とは、自らの生活環境の中で、日々の経験や教育的影響、人的物的資源から姿勢、価値観、技能、知識を身につけるための生涯に及ぶプロセスのことであり、一般的に

は、家庭における教育を指している。そして、ノンフォーマル教育とは、公式の確立された

制度以外の組織化された教育活動のことであり、教育目的をもった組織された機関で、特定の受益者に向けられるものである。

2-2：スカウト教育法について

ノンフォーマル教育について、国際的な5大ノンフォーマル教育組織は、「世界YMCA同盟」「世界YWCA」「世界スカウト機構」「ガールガイド・ガールスカウト世界連盟」「国際赤十字 赤新月社連盟」とされる。この中でも、世界スカウト機構は、日本においては、ボーイスカウトが、歴史と実績のある教育組織として知られている。

ボーイスカウト運動は、1907年イギリスで発祥した青少年教育運動である。日本には、1911（明治44）年に紹介され、後藤新平を初代総長として1922（大正11）年、少年団日本連盟が設立され、1924（大正13）年に世界事務局に登録された。加盟員数は、1983（昭和58）年の33万人をピークに、その後減少傾向が続き、現在は122,812人（2015（平成27）年3月31日付）である。

ボーイスカウト教育が他の青少年団体と異なるところは、単に、野外活動や奉仕活動などを行なうことが目的ではなく、そのプログラムに、「ちかい・おきて」の実践、班制教育、進歩制度、野外活動を取り入れているところにある。

ボーイスカウト運動には、以下の3つの特徴が上げられる。

- 1 青少年の自発活動であること。
- 2 青少年が、「誠実、勇気、自信、および国際愛と人道主義を把握すること」、「健康を築くこと」、「人生に役立つ技能を体得すること」、「社会に奉仕できること」のすなわち、「人格」「健康と体力」「知識と技能」「奉仕」を4本柱としていること。
- 3 幼児期から青年期にわたる各年齢層に適応するよう、年齢に応じた部門があり、それぞれのプログラムが一貫していること。

スカウト教育の教育目的は、「自らが進んで働きかける、積極的・能動的な社会性の涵養」とされる。そして、その教育目的を達成するため「人格」「健康と体力」「知識と技能」「奉仕」の4つの領域に関して、その資質を高めることを意図した活動がおこなわれている。さらに、その活動は、スカウトにとっては、楽しいゲームという形を基本としている。すなわち、スカウト達は、スカウティングという楽しいゲームに熱中する間に、ひとりでの、「人格」「健康と体力」「知識と技能」「奉仕」の社会人に必要な4つの資質を高めていくのである。

2-3：徳育的能力や資質とスカウト教育法について

徳育は「人間としての心情や道徳的な意識を養うための教育」を意味し、知育、体育と共に、教育の重要な一側面である。道徳教育と同義に用いられることもあるが、徳育は、知識

より能力や資質の側面に重点がおかれている。学校教育においては、2018年度から小学校で、2019年度からは中学校で、道徳が教科化されることになった。また、中央教育審議会は、子ども達の徳育的能力や資質を高める教育は、教室のみで行なわれるのではなく、現場体験、自然体験などの体験活動の重要性を指摘している（中央教育審議会, 2013 など）。

体験活動の教育効果に関して、体験活動としての組織キャンプは、自己効力（飯田ら,1992）、自尊感情と信頼感（正親ら,2016）、リーダーシップ（倉本,1981）、社会的スキル（西田ら,2002）、生きる力（橘ら,2003）などの心理社会的能力や身体的能力を高めることを明らかにしている。研修者は、日常的なボーイスカウト活動の教育効果に関して、ボーイスカウトの短期キャンプ（田中, 2016;2017）、長期キャンプ（田中, 2018a）、そして、1年間の活動（田中, 2018b ; 2019）についての一連の調査研究から、体験活動としてのボーイスカウトのキャンプは、子ども達の誠実さ、礼儀正しさ、思いやり、勇気などを高めること、また、ボーイスカウト教育が徳育的能力や資質を高める教育効果を持つことを明らかにしている。

しかし、これらの研究は、質問紙調査法による、ある特定の指標を教育の事前事後で、量的に比較するものであり、このような量的な事前事後調査による研究では、「結果としての教育効果」は明らかになるが、「過程としての教育プロセス」は依然不明のままである。すなわち、現在必要とされる研究は、個人の成長過程における限定的な教育効果に加えて、教育を個人の長期的な成長の過程として捉え、その様相を明らかにする研究である。

そこで、研修者は、今回の国内研修において、体験活動としてのボーイスカウト教育が、子どもの徳育的能力や資質を高めることに関して、ボーイスカウト教育の「過程としての教育プロセス」を質的研究により解明することを研究の目的とした。

3. 方法

3-1: 面接対象者

ボーイスカウト教育の過程としての教育プロセスを解明するためには、質問紙調査による量的研究方法ではなく、インタビュー調査等による質的研究法を用いる必要がある。そのために本研究では、“質的研究の流れの新しい方法論”であり、“個人の人生を時間と共に描くことを目標”とする複線経路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach : 以下 TEA)による質的分析 (サトウ, 2009) を用いる。TEA は、時間軸上の変容と安定・維持に着目しその有り様を描く方法論としての「複線経路・等至性モデリング (Trajectory Equifinality Model : TEM)」、対象を抽出するための「歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting : HIS) 理論」、文化的記号を取り入れて変容するメカニズムを仮定し、理解・記述するための「発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis : TLMG)」という3つの要素を統合・総括する考え方である。従来の KJ 法やグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) では、体系的に情報を抽出/切捨することで、母集団に属する人の本質的特徴を見出し、問題の「構造」を明らかにするものであるが、TEA では、個人の体験を個別に扱いつつ、時間軸上の変容と安定・維持に着目し、個人間の共通性や差異を分析し、問題の「過程」を明らかにすることができる。

本研究では、ボーイスカウト経験者の中でも、ボーイスカウト教育における進歩制度の最高位を達成したスカウトである富士スカウト達成者を調査対象者とした。富士スカウト達成者は、ボーイスカウト教育を全うしたスカウトであり、ボーイスカウト教育の完成形ともいえる。富士スカウトについて検討することで、ボーイスカウト教育の本質的な教育効果お

よびその教育プロセスが明確となる。

なお、調査対象を子どもではなく、社会人としたのは、調査協力者が、自身のボーイスカウトの経験を主観的、および、客観的に語る事が可能であるためである。

また、TEA では、1人の調査協力者に、3回の面接を実施することにより、1回目は研究者の視点 (Intra-view)、2回目は研究者と調査協力者の視点の拡張(Inter-view)、3回目は研究者と調査協力者の視点の融合(Trans-view)による分析が可能になるとし、3回の面接を奨励している。また、調査対象者数は、TEA において提唱されている1・4・9の法則（1人：個人の径路の深みを探る、4±1人：経験の多様性を描く、9±2人：径路の類型を把握する）（荒川ら、2012）に従い、富士スカウト達成者3名を調査対象者とした（表1）。

表1：面接対象者

居住地	氏名	職業・年齢
大阪府	A氏	高校教諭・40代
福井県	B氏	自営業・40代
福岡県	C氏	中学教諭・50代

3-2：面接方法

面接調査は、まず、調査に先立ち、研究説明書に従って、研究の概要の説明と、協力への同意と研究同意書への署名を得た後、インタビューガイドに沿って、半構造化面接により実施した。どの面接も、概ね、1時間から1時間30分を要した。

3-3：面接内容

①挨拶と自己紹介

②調査の説明

③協力への同意：同意書へのサイン

④面接の開始・ICレコーダーによる録音開始

「ご説明いたしました通り、ボーイスカウト教育について調査しております。特に、ボーイスカウトでのご経験が、社会人となった今、どのように繋がり、役にたっているのか、主にそのことに関して、ご自身の経験に基づいて、ぜひお話を聞かせていただきたいと思っています。」

⑤質問

質問1：基本属性（年齢、職業、住居形態、性別、出身）などを尋ねる。

質問2：ボーイスカウトをやっていて良かったこと

「それでは、これから、ボーイスカウトでの経験についてお話いただきたいと思えます。思いっくままにお答えいただいて結構です。また、長いスカウト経験のお話ですので、話があちこちに拡散することもあると思いますが、後日、こちらでまとめますので、ご自由にお話ください。また、こちらからの質問について、答えたく

ないと思われる場合はお答えにならなくても結構です。その際は遠慮なく教えてください。」

Q2-1-1: 社会人になって、ボーイスカウトをやっていて良かったと思ったことがありますか？

Q2-1-2: 良かったと思ったことについて、具体的に、どのような内容でしょうか？

Q2-1-3: そのことの元となっているのは、どのようなスカウト活動での経験でしょうか？具体的に教えてください。

Q2-1-4: 今までお話になったことを、〇〇の経験は、××を身につけることができる。というように、一言で言うと、どのようになるのでしょうか？

質問3: ボーイスカウトをやっていて悪かったこと

Q3-1-1: それでは、逆に、社会人になって、ボーイスカウトをやらなければ良かったと思うことはありますか？

Q3-1-2: 具体的に、どのようなことでしょうか？

Q3-1-3: そのことの元となっているのは、どのようなスカウト活動での経験でしょうか？具体的に教えてください。

Q3-1-4: 今までお話になったことを、〇〇の経験は、××を△△する。or××になる。or××となる。というように、一言で言うと、どのようになるのでしょうか？

⑥あいさつ

4. 結果

4-1: 面接実施日

A氏、B氏、C氏とも、国内研修期間中に2回の面接を実施した（表2）。

表2：調査スケジュール（調査済み、および、調査予定）

調査対象：回数	面接日
A氏：1回目の面接調査	8月9日
A氏：2回目の面接調査	7月5日
B氏：1回目の面接調査	9月10日
B氏：2回目の面接調査	9月14日
C氏：1回目の面接調査	5月24日
C氏：2回目の面接調査	8月5日
A氏・B氏・C氏：3回目の面接調査	1～3月（予定）

4-2 分析結果

4-2-1：A氏のTEM図：面接1回目

カブスカウト年代：指導者からスカウト活動の楽しさを教えてもらった時期

A氏は、親のすすめでカブスカウトに入隊した。活動のために、学校で、一人で行くことが禁止されていた校区外へ行ったり、キャンプファイヤーや地図、コンパスを使うなど、回りの同年代の子どもにはできない体験をする「優越感」や「活動の楽しさ」を感じていた。

ボーイスカウト年代：スカウト活動とクラブ活動との両立、班活動を楽しんだ時期

中学で、非常に活動が盛んなバスケットボール部に入り、ボーイスカウト活動との両立が大変だったが、ボーイスカウト活動の魅力と両親のサポートにより、ボーイスカウトの活動を継続できた。班長となった夏キャンプで、テントを忘れるという大きな失敗をしたが、日頃の訓練と班員との協力で、失敗を克服した。

シニアスカウト年代：多くの活動と指導者の指導を得て富士スカウトを達成した時期

甲子園での選抜高校野球大会での奉仕、ペーロン大会、熊野古道のハイクなど、多くの活動を経験し、熱心な指導者の指導により、富士スカウトを達成することが出来た。

ローバースカウト年代：富士スカウトとしての自覚と自分の力で動き出した時期

両親や他者からの反応で、「模範としての富士スカウト」の自覚と「理想としての富士スカウト」への努力を意識し、国内外での活動から、個人での活動が可能となった。

社会人：得がたいボーイスカウトの経験と人のつながりが継続

ボーイスカウトをやっていないとできない経験、出会えない人との出会いや、「奉仕の心」を身につけることから、「ボーイスカウトをやっていて良かった」と思える。

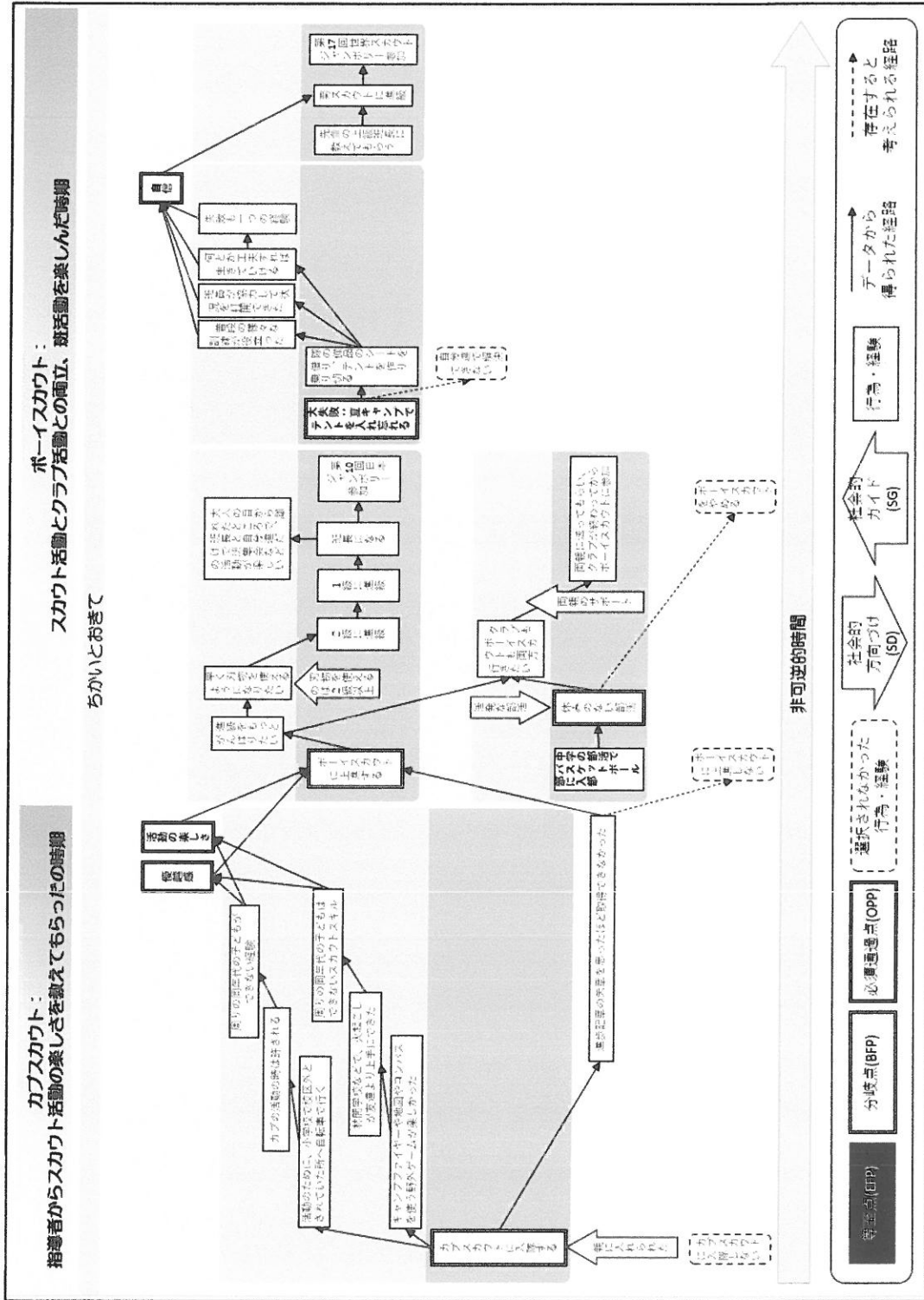


図1-1: A氏のTEMEM 1/3

シニアスカウト：多くのスカウト活動と指導者の指導を得て富士スカウトを達成した時期

ちがいとおきて

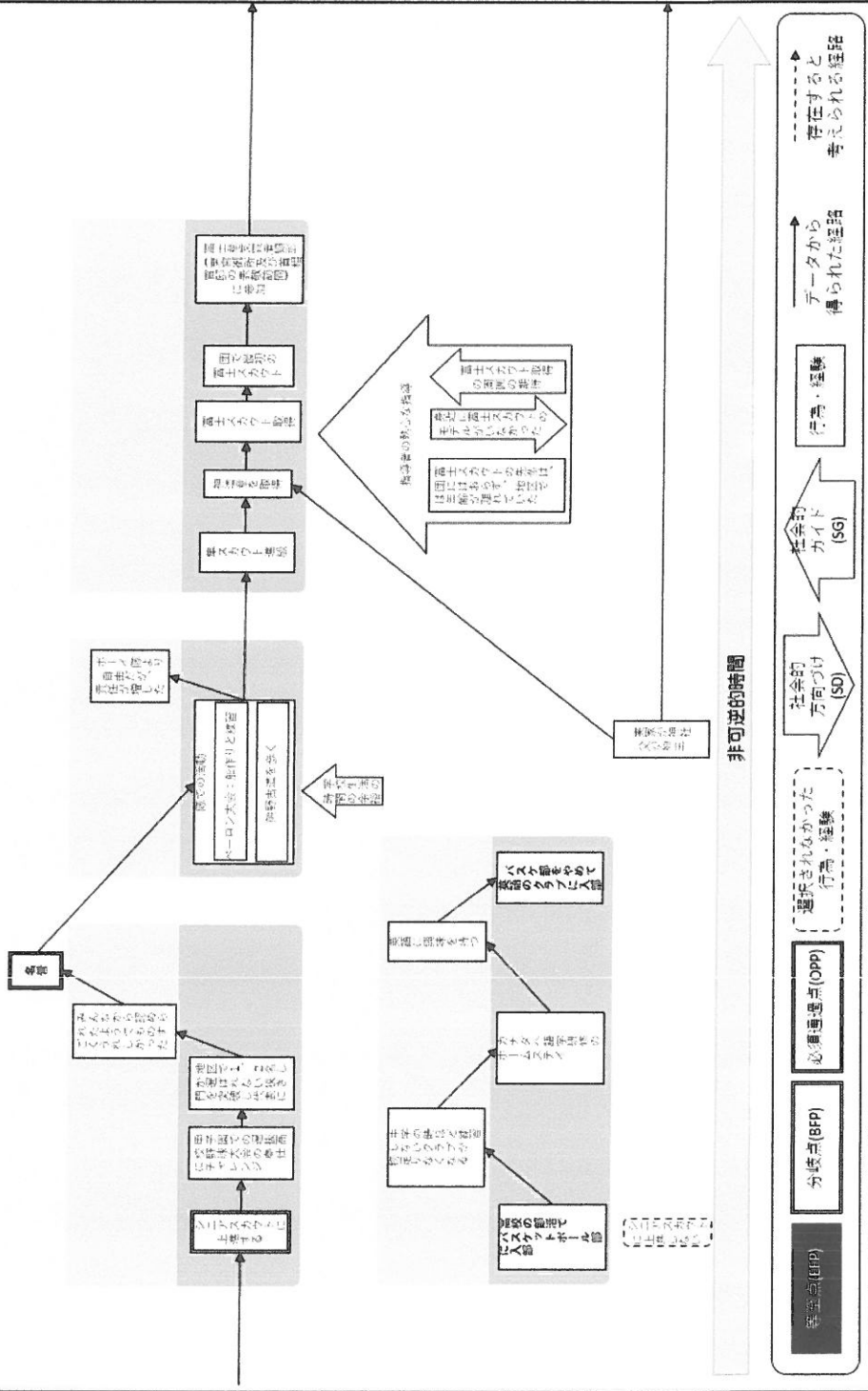


図1-2：A氏のTEM図 2/3

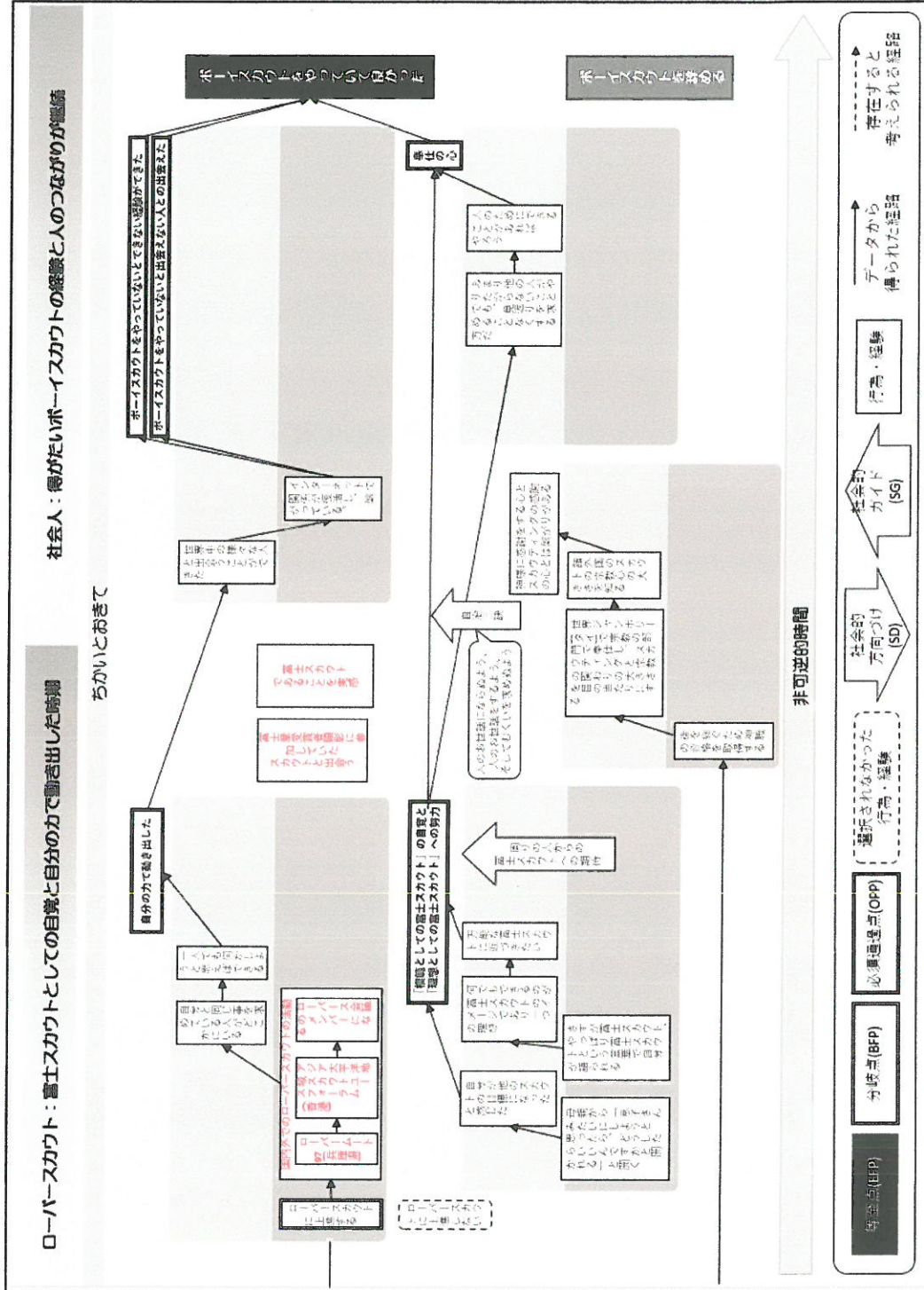


図1-3：A氏のTEM図 3/3

4-2-2 : B氏のTEM図 : 面接1回目

ボーイスカウト年代 : ボーイスカウト活動を楽しんだ時期

ボーイスカウトに入隊し、スカウトスキルを習得し一級スカウトに進級したが、菊スカウトには進級せず、富士スカウトへの進級は無理だと思っていた。本来は、スカウトが班長を決めるはずが、指導者が大人のエゴで上級班長を決めたことに大きな疑問を感じた。

シニアスカウト年代 : 富士スカウトへのチャレンジと世界ジャンボリーへの参加

他団の友人が富士スカウトを目指すことから、自分も富士スカウトを目指した。短い期間で段取りの大切さ、目的、目標の設定、評価が重要であることに気付いた。世界ジャンボリーで、スカウティングの楽しさを経験し、3ビーズの指導者を見て、自分もウッドバッチャーになることを決意した。

ローバースカウト年代 : 指導者としての活動

ボーイ隊のリーダーになり、研修所や実修所での経験などからコミュニケーションスキルの重要性に気付いた。海外への派遣などから、海外への関心が大きくなった。

社会人 : 指導者としての活動

日常生活や、海外旅行に行く際の準備、経験、現地での経験から、PDCAサイクルの有効性と重要性を実感した。ボーイスカウトの様々な経験、4ビーズを取得したことから、「ボーイスカウトをやっていて良かった」と思える。

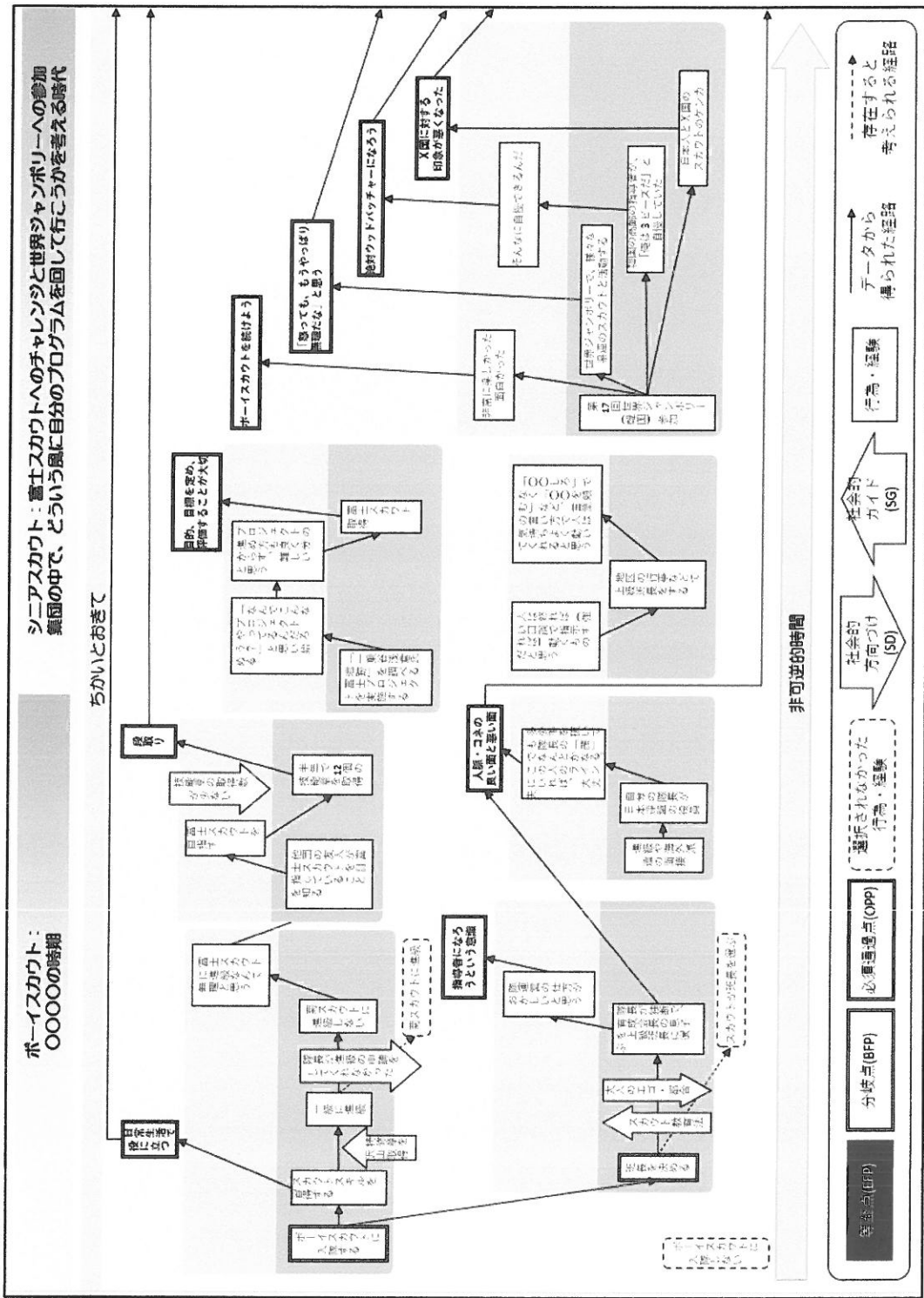


図2-1：B氏のTEM 1/2

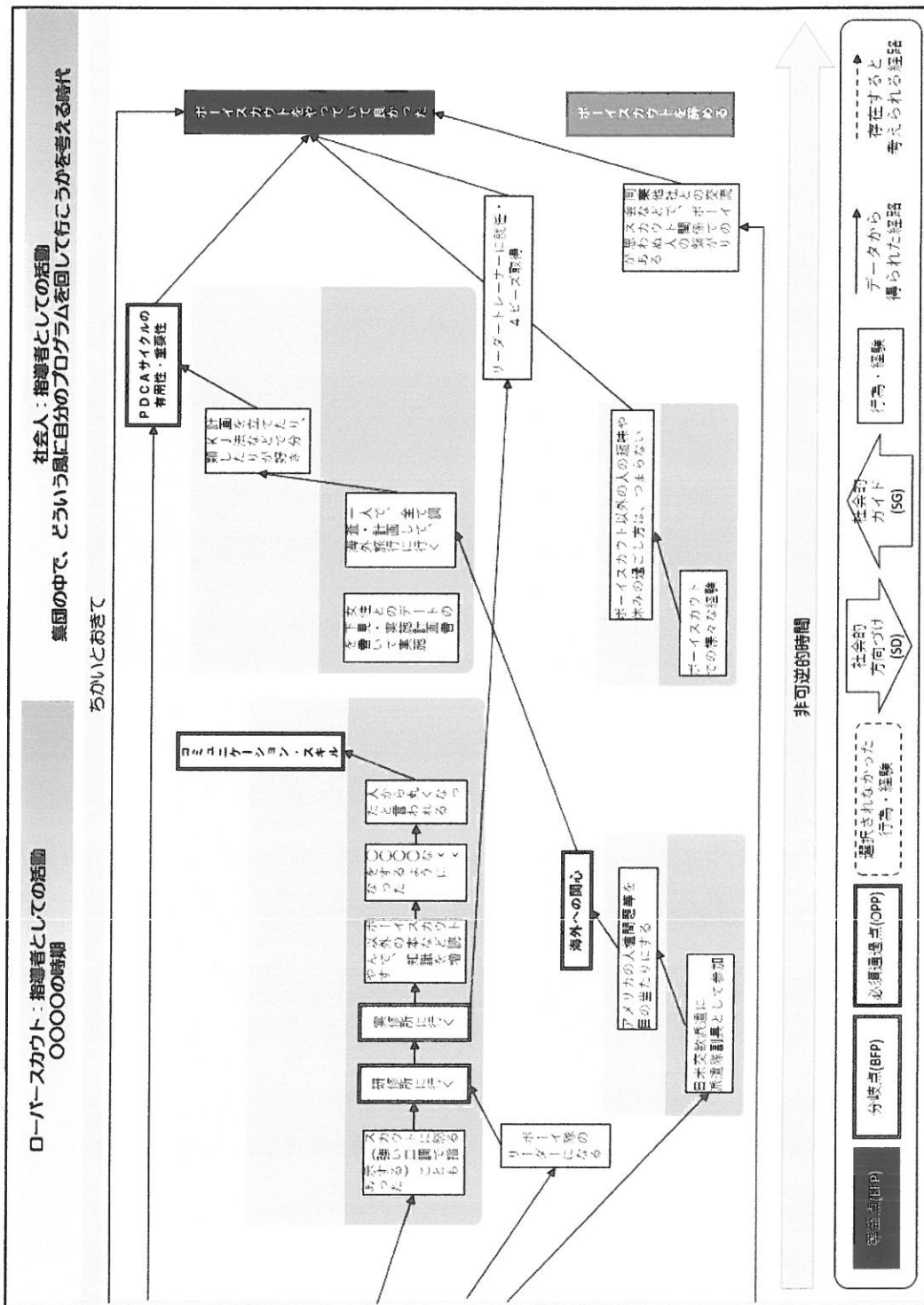


図2-2：B氏のTEM図 2/2

4-2-3 : C氏のTEM図 : 面接2回目

ボーイスカウト年代 : 菊スカウトに向かって走っていた時期

ボーイスカウトに入隊し、周りが見えないくらい自分の活動に集中し、菊スカウトに進級して「自尊心」「名誉」を得た。

シニアスカウト年代 : 隼スカウトへのチャレンジ

隼スカウトにチャレンジする中で、バディとの関係、友人を自分の企画に巻き込んでいくことから、自分を無くし、相手の考えに寄り添うなど「忠誠心・ロイヤルティ」を得た。日本ジャンボリーで2人の富士スカウトと出会い、富士スカウトへの憧れを強く抱いた。

シニアスカウト年代 : 富士スカウトへのチャレンジ

富士スカウトにチャレンジする中で、宗教章取得と個人プロジェクトを進める中から、「スカウティングの実践における宗教の必要性」と「一人で考え、一人でできることの重要性」を実感した。

シニアスカウト年代 : 富士スカウト取得「自己実現と富士章の重み」

富士スカウトを取得し、自己実現を果たすが、同時に、富士章の重みを実感した。

ローバースカウト年代 : モラトリアムな一年、宗教を足場にもう一回自分を立て直した時期

浪人し大学進学し、モラトリアムな時期を過ごす。出家することから宗教についての理解を深め、ボーイスカウトと宗教の両方から自分を立て直すことができた。

ローバースカウト年代 : 自己実現の先に他者がいる

ピーキーな13人の友人とのローバーリングの展開や、地区における活動などから、自己実現の先に他者がいることを実感し、「奉仕の心」を得た。

ローバースカウト年代：スカウト活動への失望

大学生でまだ駆け出しの自分に地区のコミッショナー就任を打診され、スカウト教育法とは違う部分で大人の事情が動いていることを実感し、スカウト活動への魅力を急激に失った。

社会人：制服を着ていなくてもスカウティングを実践している

教員となり、しばらくして、ボーイスカウトを休隊し、制服を脱ぐが、仕事の中で、スカウティングを実践する。制服は着ていなくてもスカウティングは常にやっているという自覚から、「ボーイスカウトをやっていて良かった」と思える。

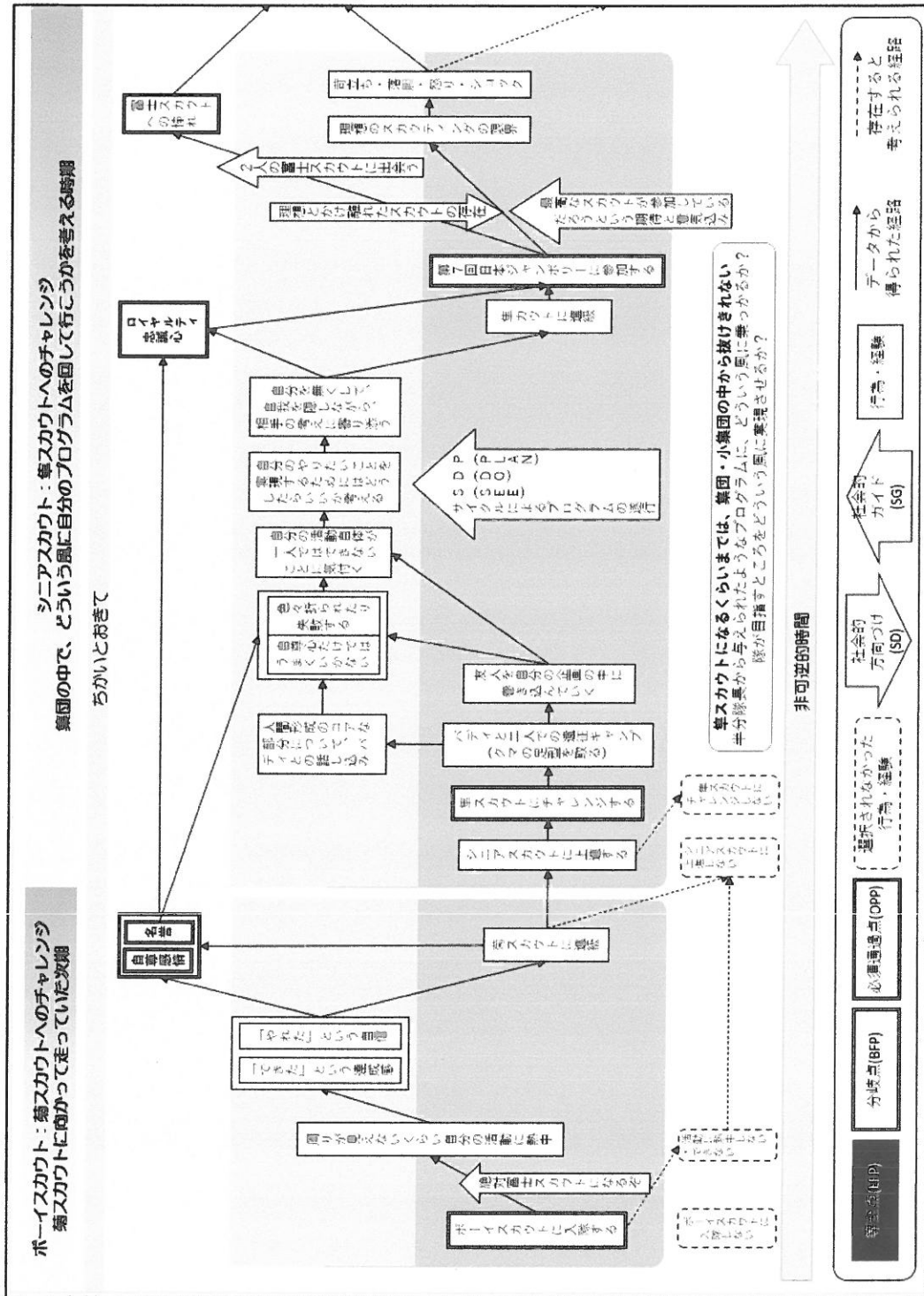


図 3-1 : C氏のTEM図 1/4

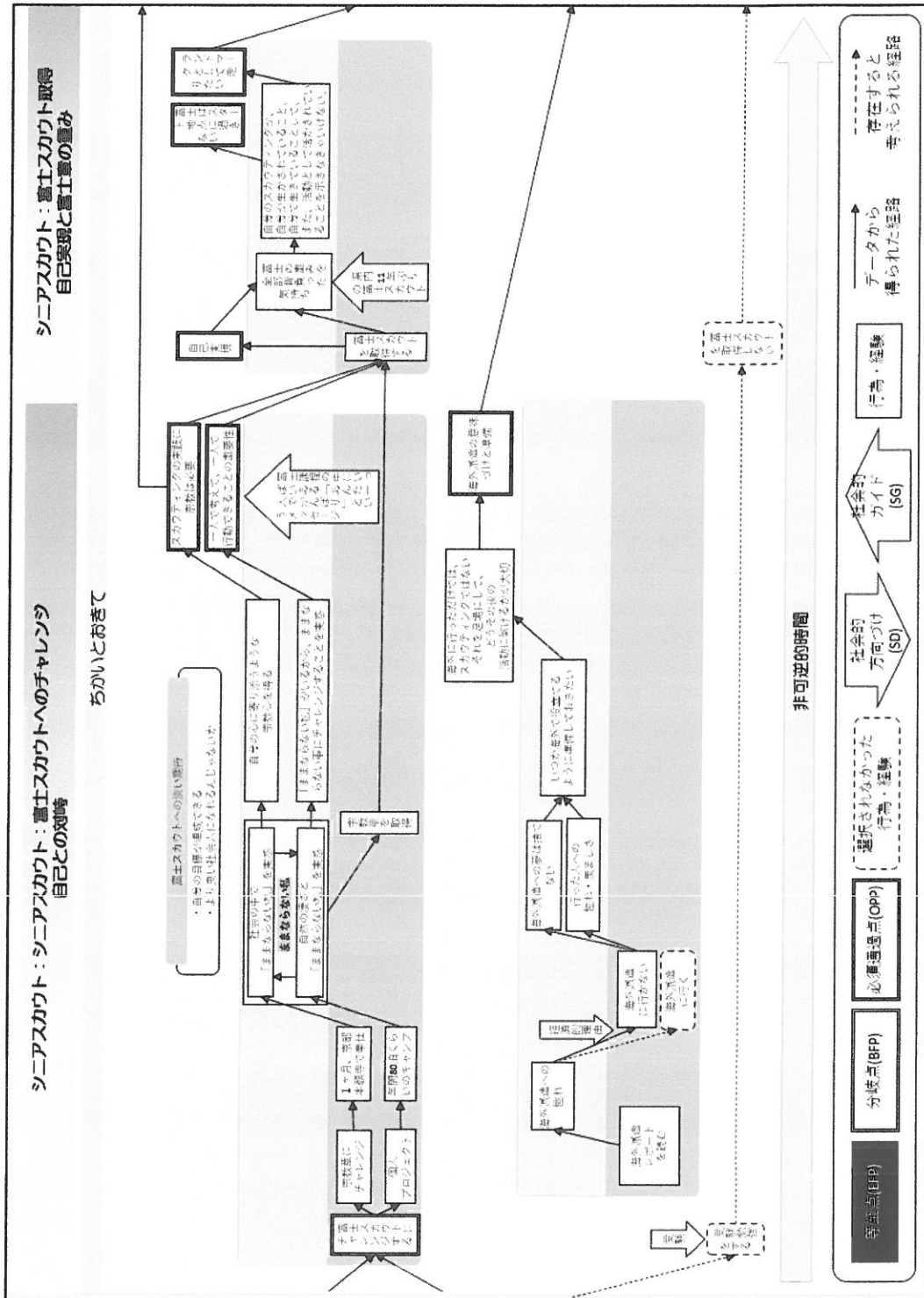


図 3-2 : C氏のTEM図 2/4

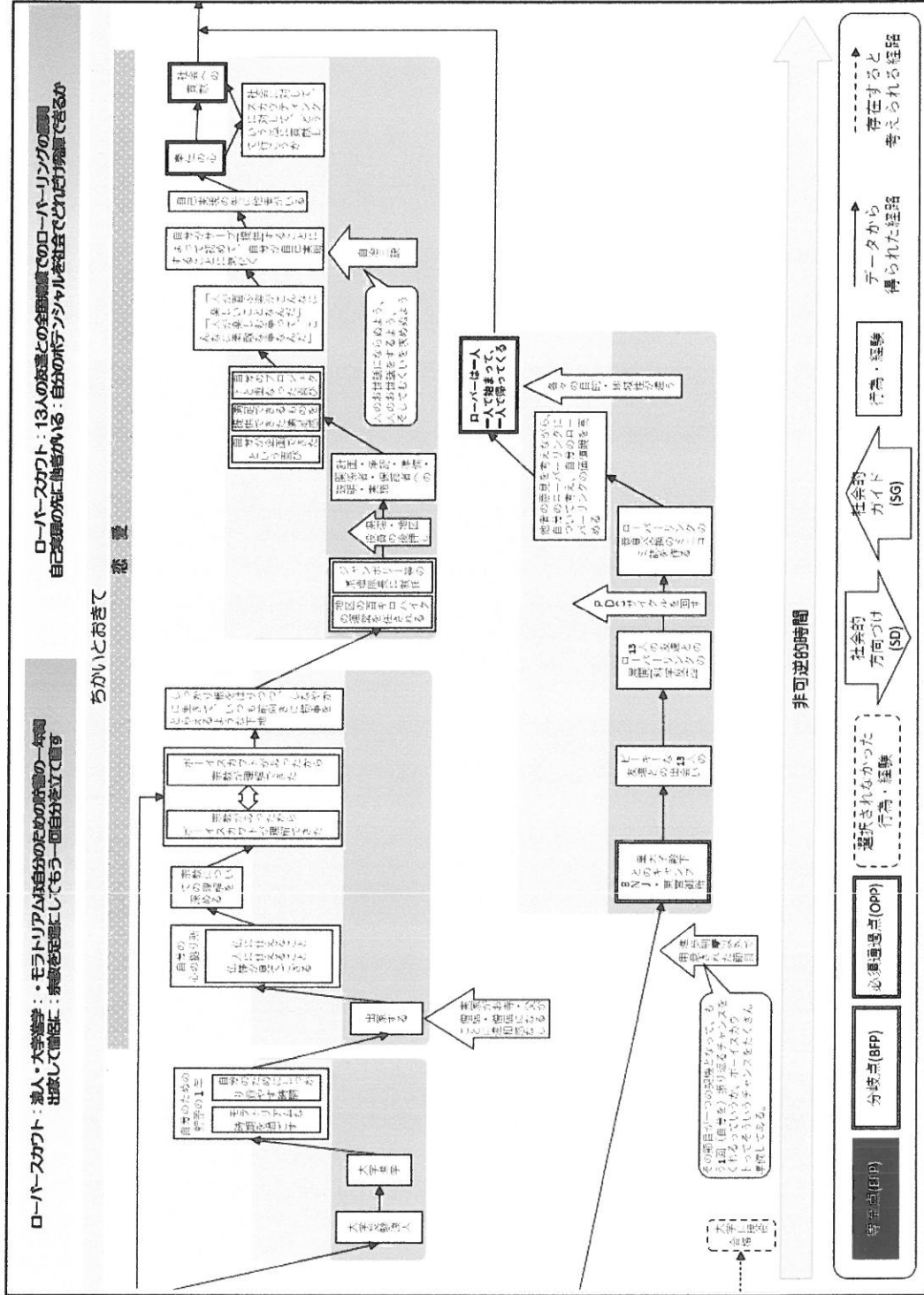


図3-3 C氏のTEM図 3/4

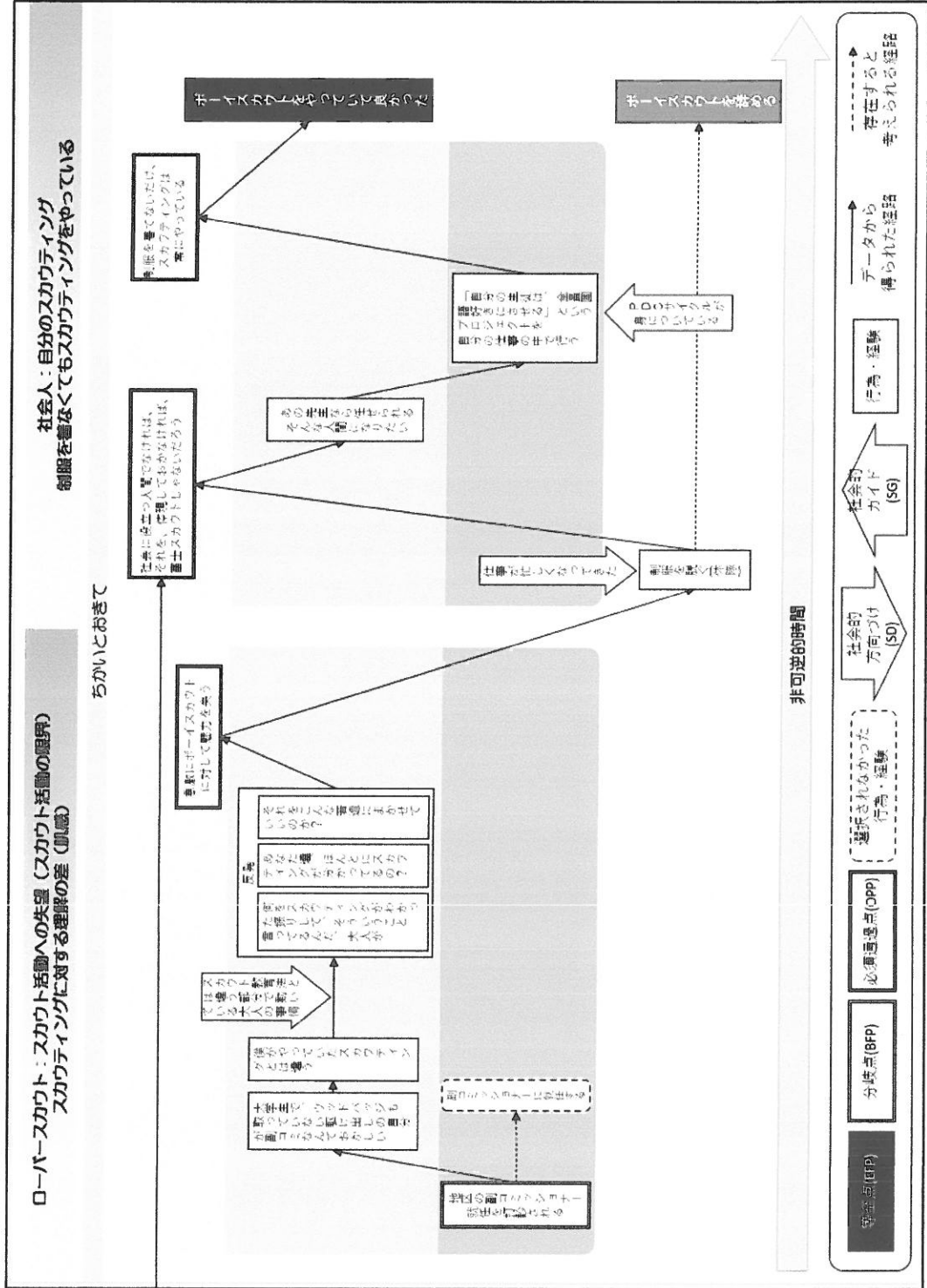


図3-4：C氏のTEM図 4/4

5. 考察

A氏、B氏、C氏のTEM図から、共通していることは、富士スカウトを達成することで、スカウティングにおけるPDCAサイクルの重要性や、その後の仕事や生活における有用性であった。また、ボーイスカウトでしか経験できない経験や人との出会い、繋がりがA氏とC氏は、スカウティングの実践における宗教の意味合いについて言及していた。特に、C氏は、宗教における「社会の中でのままならない私」とキャンプの「自然の凄さとままならない私」との間に共通点を見出し、宗教において、また、スカウティングにおいて、「自分」を考えることの意味を語っていた。

また、A氏とC氏は、富士スカウト達成後に、富士スカウトに対する、周りの他者の期待や、自らが他者に対して「模範」としての、あるいは、「目標」としての富士スカウトであることを常に示さなければならないという自覚や、自らの「理想としての富士スカウト」への努力などを、富士スカウトの重みとして語っていた。

また、A氏は、シニアスカウトの時、富士スカウト取得に際して、あまり苦勞せず、むしろ、活動をすることで、自然と富士スカウトを達成したが、富士スカウト達成後、ローバースカウトになって初めて、富士スカウトとしての重みを実感したと語っていた。これは、本人は、楽しみながら、スカウティングの活動をしているが、意識しないうちに、「富士スカウト」という非常に意味のあることを達成していたことを示しており、教育の目的を楽しみながら達成できるという意味で、ボーイスカウト教育が、非常に理想的な教育であることを示しているといえる。

なお、A氏、B氏、C氏のTEM図は、3回の面接を経て完成する。3名の調査対象者は、いずれも、国内研修期間中に2回の面接が終了し、3回目は、国内研修期間終了後に行なう予定である。そのために、本報告書に記載した結果（TEM図）は、今後、3回目の面接を受けて、修正される予定である。また、2019年9月13日に、TEA/TEMの研究の第一人者である安田裕子氏に、本研究のTEM図についてコメントと修正ポイントのご指摘を頂いており、修正したTEM図を、2019年11月24日に開催される、日本質的心理学会・日本精神衛生学会で共催される複線径路等至性アプローチ（TEA）のワークショップ（武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス）にて発表する予定である。その際にも、いくつかの修正ポイントのアイデアを得られる見込みである。最終的な分析結果と考察は、これらの修正を経たTEM図について行なわれるべきであるが、本報告では、現時点での考察を記した。

【文献】

- 中央教育審議会(2013). 今後の青少年の体験活動の推進について(答申)<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1330231_01.pdf>(2015年6月18日)
- 飯田稔・関根章文(1992). キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果 筑波大学体育科学系紀要、15, 93-102.
- 倉本満枝(1981). キャンプ集団における児童のリーダーシップ行動の変容 実験社会心理学研究, 20(2), 127-135.
- 正親秀章・平野智之・茅野理子(2016). 組織キャンプ体験が生徒の自尊感情と信頼感に及ぼす影響 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 2, 235-238.
- 西田順一・橋本公雄・徳永幹雄・柳 敏晴(2002). 組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果 野外教育研究, 5-2, 45-54.
- サトウタツヤ(2009). TEMではじめる質的研究 ——時間とプロセスを扱う研究をめざして 誠信書房
- 橘 直隆・平野吉直・関根章文(2003). 長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響 野外教育研究, 6-2, 1-12.
- 田中優(2016). ボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響 人間関係学研究: 社会学社会心理学人間福祉学: 大妻女子大学人間関係学部紀要, 17, 1-14.
- 田中優(2017). ボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響2 —2014年および2015年度における継続調査による検討—. 人間関係学研究: 社会学社会心理学

人間福祉学：大妻女子大学人間関係学部紀要，18，141-153.

田中優（2018a）. ボーイスカウトの夏季キャンプ参加が生きる力，リーダーシップ，および，自尊心に与える影響 人間生活文化研究，28，428-434.

田中優（2018b）. スカウトキャンプの教育効果について－ 夏季キャンプでスカウトが得た成果－ 日本野外教育学会第21回大会論文集，88.

田中優（2019）. ボーイスカウトにおけるキャンプの教育効果について－スカウトがキャンプで得た成果，および，興味・関心の変化について－ 人間生活文化研究，29，57-64.

田中優・安藤正紀・櫻井康博・中島豊・黒澤岳博・孫佳茹(2019). ボーイスカウトにおける1年間のスカウト活動の教育効果について 日本心理学会第83回大会発表論文集，943.

研修先：玉川大学

研修期間：2019年4月1日から2019年9月14日まで 6ヶ月

指導教授：安藤正紀（玉川大学 大学院教育学研究科・教授）